

小論文問題用紙

問題 次の文章を読んで、「人は誰も、その内なる世界に一人の詩人を宿している」ということについて、あなたの考えを述べなさい。
字数は七〇〇字以上八〇〇字以下とします。

詩を書くとき、人は少なくとも世に二つの「詩」を生み出す。目に見える文字で記された詩と、心のなかでもう一つの言葉によってつむがれ、世に知られないまま、しかし、確かに存在し続ける、いわば見えない「詩」である。

文字となった詩を作る人を、世は詩人と呼ぶ。しかし、詩人が生を中心に詩情を据えて生きる人を指すのなら、詩を世に送りだすことのない隠れた詩人は、多く存在している。むしろ、人は誰も、その内なる世界に一人の詩人を宿している。

意図しないまま、意味の深みにふれるような言葉を、ふと口にするという経験は、誰にもあるだろう。それを聞いた相手が、詩人みたいだ、という。

このやりとりには、単なる軽口の応酬に終わらない何かがある。このとき人は、心のどこかで「詩」とは何かを、明言できないままに、はつきりと感じている。

「言いたくない言葉」と題する茨木のり子（一九二六～二〇〇六）の詩がある。現代日本を代表する詩人のひとりだが、自分の舞台裏をそつと見せてくれたような、ほかの作品とは少し感触の異なる、じつに印象深い一編だ。この作品は、次のような一節から始まる。

心の底に 強い圧力をかけて

蔵ってある言葉

声に出せば

文字に記せば

たちまちに色褪せるだろう

〔茨木のり子詩集〕

心の奥にあって詩人であることの源泉となる言葉は、文字にした途端、その生命を失う、というのである。ここでは、文字、あるいは声にならない意味のうごめきを「コトバ」と書くことにする。

詩とは何かを定義するのは、文学とは何かを言明しようとするのに似て、語れば語るほどその余白を感じるような終わりのない主題だが、それでもなお、詩を定義しようとするなら、詩とは、言葉の器には収まらないコトバが世に顕現することだといえるのかもしれない。

顕現といっても、そのすべてが顕われるのではない。そのありようは、強烈な光源を伴う何ものかが接近してくるのに似ている。人がふれ得るのは、光の淵源ではなく、放たれた光線に過ぎない。光は太陽から発せられる。ただ、太陽そのものを直接見ることはできない。その熱を感じ、光を浴びるだけである。しかし、それでも私たちの世界観を覆すには十分な出来事だ。

先の一節に続けて茨木は、言葉たり得ないコトバとは「それによって／私が立つところのもの」、すなわち、見えない立脚地であり、「それによって／私が生かしめられているところの思念」であるという。

コトバによって生かされている、と彼女は感じている。ある人は、言葉の「力」によって他をねじ伏せ、わが身を守ろうとする。そのとき言葉は、人間の道具になる。だが茨木の実感はまだ違う。自分が生きるために言葉を用いるのではない。コトバを内包している言葉は、人間が意思を表現する道具ではなく、自らを、そして万物を生かしているはたらきだと感じている。

彼女にとって言葉の本当の姿は、五感で認識できるはたらきにあるのではない。それは、「いのち」を根底から支える不可視な「ちから」にほかならない。先の一節に彼女はこう続けている。

人に伝えようとすれば

あまりに平凡すぎて

けっして伝わってはゆかないだろう

その人の気圧のなかでしか

生きられぬ言葉もある

その人の存在を司る言葉は、凡庸な姿をしている。それゆえに他者のもとに届きにくい。だが、姿が平凡であるからといって、その言葉に「ちから」がないとは限らない。それを私たちが実感できるのは、己の内なる世界の「気圧のなか」であるように思われる、というのである。

人は、しばしば素朴な言葉、ありふれた言葉と出会うことができずに苦しんでいる。

「おはよう」「ありがとう」「おやすみなさい」。これまで幾度となく聞いた言葉も、ある日、あるとき、ある人から発せられると魔法になる。その言葉は種子となって、受け取った者の心に根づき、葉を茂らせ、花を咲かせる。